

## 中学校の特別支援学級教員の ニーズへのスクールカウンセラーの 対処プロセス

菅原 紘子\*

### Coping of a School Counselor with the Need for Special Education Teachers in Junior High School

Hiroko SUGAWARA\*

This study used participant observation for 4 months to analyze how a school counselor coped with the need for special education teachers in a junior high school in Japan. The findings are as follows: First, the coping process reflected the usual school system in which the teacher played the role of "gatekeeper" (Yasuda, 2014). Second, the effect of mere exposure (Zajonc, 1968) could occur because of the counselor's attendance at teachers' weekly meetings. It is suggested that numerous communication opportunities allow for the establishment of rapport and a proper understanding of the need for special education teachers.

**key word:** School counselor, special education, need for teachers

#### 問題と目的

日本では、2007年度に改正学校教育法が施行され、特別支援教育のシステム構築が進む一方、スクールカウンセラー（以下SCと略記）の配置が1995年度から進められている。近年SCに求められるニーズの1つに「特別支援および支援の必要な児童・生徒に関わること」がある（岩田・大芦・鎌原・中澤・蘭・三浦，2009）。

本研究では、筆者がSCとして勤務した中学校における特別支援学級教員のニーズの汲み取りと実行のプロセスを取り上げる。中学校の特別支援学級の生徒の性被害を未然に防ぎたいとの特別支援コーディネーター（以下COと略記）の教員のニーズにSCが対応した実践について、その行動プロセスを記述することで学校内のSCと教職員の連携について一考する。

#### フィールドと方法

本研究のフィールドとなったA中学校は、各学年、複数の普通学級と1クラスの特別支援学級が併設された中規模校である。筆者は20XX-1年度からSCとしてA中学校に勤務し

た。筆者は女性で、この時点で臨床歴は5年以上10年未満であり、SCとしての勤務はA中学校が初めてであったが、福祉・医療分野で小中学生に接したことはあった。このことはA中学校での勤務開始時に管理職に伝えていた。

A中学校では、SCは週1回の勤務である。勤務日には原則として毎回校内委員会（校長、副校長、各学年の主任教諭、CO、養護教諭、SCによって構成）に参加し、それ以外の時間に個別の面接やコンサルテーションを行っていた。また、原則として勤務開始時と勤務終了時には管理職と打ち合わせや情報交換を行った。

特別支援学級の生徒には、普段からCOの紹介を受け、個別に生徒の面接やコンサルテーションを行っていた。また、所属自治体の事業として、20XX年度、中1の生徒を対象にSCが7月までに全員面接を行うこととなり、4月から6月にかけて全生徒の面接を実施した。

本研究の前提として、20XX-1年度の時点でCOからSCに、中学生になると長期休暇には親の目が届きにくい所に行動範囲が広がり、指導はしているものの、中1の夏休みは初めての長期休暇で心配だという話を聞いていた。学校としても普段から特別支援学級の生徒の安全対策を考える雰囲気があった。このような状況の中、改めてCOから中1の夏休みまでに性被害を防止するスキルを身につけさせたいと依頼があり、SCが過去に対応した経験をふまえ、取り組んでみることとなった。

本研究の記録はSCが勤務日に教職員に伝えたことをメモ書きした備忘録的なフィールドノーツを元に作成した。観察期間は20XX年4月から7月である。本研究をまとめるにあたっては、校長に許可をとった。

#### 結 果

Table 1に、A中学校での20XX年度のSCと教職員の関わりと特別支援学級の生徒への面接実施状況を示した。

20XX年度にA中学校で全員面接を実施することになり、SCは特別支援学級の全員面接の実施に向けてCOを窓口調整を行った。中学校入学のガイダンス的な個別面接を行う計画を立てた。勤務4回目、校内委員会でのCOの発言を聞いてSCは当初の計画に一部変更を加えることを提案した（Table 1）。理由は以下の3点からなる。第一にもともと前年度の個別面接を通してSCがCOのもつ“生徒たちに少しでも対処スキルを身につけさせたい”との認識を共有していた。第二に中1女子複数にスキルを身につけさせたいとCOが校内委員会発言したことでニーズが明確になり、SCが汲み取りやすくなった。第三に、全員面接は個別面接の形式で当初健康診断に付随させ男子から先に行っていて女子は全員未実施だったため、女子にプラスアルファで内容を付加するのは可能と判断した。

勤務4回目のCOとの調整では、COから生徒がとってほしい具体的な行動を伝えてきた。スカート履いて座るときは

\* 信州大学総合健康安全センター  
Center for Health, Safety and Environmental Management,  
Shinshu University, 3-1-1 Asahi, Matsumoto-shi, Nagano  
390-8621, Japan

Table 1 全員面接・心理教育実施に関するSCと教職員の関わり

勤務回数	コミュニケーションの方向	内容	面接実施状況
1	管理職→SC SC→養護教諭 SC→CO	全員面接の依頼 問合せ（健康診断の日程） 説明（全員面接実施計画）	
3	CO→SC SC→CO	気がかりな生徒の個別説明 報告（全員面接開始）	全員面接 一部実施
4	CO→校内委員会 SC→CO SC⇄CO	1年女子の性被害防止スキル未修得が心配と発言 提案（全員面接時に1年女子に心理教育可能） 打合せ（心理教育の内容）	
5	SC→養護教諭 SC→司書 SC→CO	確認（A中の性教育時期） 問合せ（参考図書の有無） 報告（全員面接終了）	全員面接 実施
6	SC→管理職	報告（全員面接終了）	
7	SC⇄管理職 SC→司書	打合せ（心理教育の内容） 要望（図書の購入希望）	
10	SC⇄CO	打合せ（心理教育の内容）	
11	司書→SC SC→CO	報告（希望図書の到着） 報告（心理教育実施完了）	集団心理 教育実施

注）この表には特別支援学級の全員面接と集団心理教育に関する対応のみ記載した。関連の対応がない日は割愛した。

下着を見せない、公園で不審者にどこかに連れて行かれそうになったら声をあげて逃げる、といったことである。SCはこれを勤務5回目、11回目の実施場面で活用した。また、勤務5回目に養護教諭からA中学校での性教育の時期を聞いた。

勤務5回目には女子生徒への個別面接を行った（Table 1）。相談室の使い方のガイダンス、中学校生活に関する質問紙を実施した後、自己肯定感をもつ大切さを伝え、書籍のイラストを用いて女子のプライベートゾーンを説明した。質問には適宜答えた。夏休み前の勤務11回目には特別支援学級の中1女子生徒全員に、復習と「いやだ」と思った時のロールプレイを行った。

### 考 察

今回のプロセスについての考察は以下の通りである。

4回目の勤務日に、校内委員会でもCOがニーズを発信し、その後、SCがそのニーズを実行に移したプロセスでは（Table 1参照）、保田（2014）のいう「ゲートキーパー」機能がはたらいたと考える。保田（2014）は、SCなど専門職の学校配置後の小・中学校を分析し、教師が「ゲートキーパー」として各専門職の職務管轄権をあらかじめ配分する役割を担い、生徒の

抱える問題の性質に応じて職務をSCなどの専門職に振り分けていることを見出している。A中学校では、特別支援学級の生徒に関し、日常的にCOからSCに対して明確な依頼が伝えられていた。A中学校でもCOがゲートキーパーとしてSCに業務を振り分けるシステムが機能しており、COによる振り分けのもと、SCが性教育の一部を担う形をとったともいえる。

ニーズの汲み取りが容易となった背景として管理職の配慮でSCが教職員と顔を合わせる機会が多くとられていたことがあげられる。接触回数が多くなるほどその対象に好意的になることは単純接触の効果（Zajonc, 1968）とよばれる。A中学校では校内委員会にSCが参加することで前後にSCから教職員に話しかけたり教職員から話しかけられる機会をもちやすくなった。それによりSCと教職員の間でラポールが形成され意思疎通しやすくなったと考える。

今回のような性教育をSCがしなくてもいいのではどの考えもあるだろう。伊藤（2013）は、性教育に関し、くりかえし説明する大切さを述べている。本研究はA中学校の教職員が取り組んでいる課題にSCがどう関わったか記述したものであり、それぞれの学校のニーズにあわせSCが何らかの形で課題に関わることを示すものとする。

今回きっかけとなった全員面接は、所属自治体の事業としてこの年が開始年度であった。このような新たな仕組みを導入することはSC、教職員ともに変化が生じうが、今回のように現場のニーズを新たに実行しやすくなる機能をもつことが示された。本研究は、SCがCOなどの教職員と連携しながら現場のニーズに応えようとする業務改善の行動記録ともいえる。SCの業務には従来から教職員に対するコンサルテーションが含まれている。それぞれの学校での固有の課題や新たな課題にSCと教職員が連携して取り組むためには、現況の改善策を捜し求める組織やコミュニティが研究者とチームになって実行するアクションリサーチ（Greenwood & Lewin, 2007）の考えを援用した実践の取り組みが求められるのかもしれない。

### 引用文献

- Greenwood, D. J., & Lewin, M. 2007 *Introduction to Action Research 2nd Edition*. Thousand Oaks: Sage.
- 保田直美 2014 学校への新しい専門職の配置と教師役割教育研究, 81(1), 1-13.
- 伊藤修毅 2013 イラスト版 発達に遅れのある子どもと学ぶ性のはなし: 子どもとマスターする性のしくみ・いのちの大切さ 合同出版
- 岩田美保・大芦 治・鎌原雅彦・中澤 潤・蘭 千壽・三浦香苗 2009 現職教員が教育現場で現在直面している問題とスクール・カウンセラーに対するニーズに関する調査報告 千葉大学教育学部研究紀要, 57, 103-107.
- Zajonc, R. B. 1968 Attitudinal effects of mere exposure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 9(2-2), 1-27.

（受稿：2015.7.31；受理：2016.1.13）